



発行所
高崎高校同窓会
高崎市乗附町723
TEL 0273-24-0074

編集兼発行人
戸塚 興 嗣

印刷所

新校舎第二期工事進行中



二期工事中新校舎
(写真は49回卒岩山写真提供)

両棟を結ぶ通路棟の建築ということでした。が、予算の関係で管理棟の東半分の通路棟に縮小されました。

管理棟は、一階は東より保健室、通信制課程関係の教務室その他、宿直室、公仕室となっており、二階は大・小会議室、応接室、校長室、事務室の予定になります。三階は特別教室で地学教室・同準備室等、社会科教室・同準備室、生徒会室になっております。なお屋上(地学教室の上)にはドームを設置する基礎工事も行われます。

前回の会報でお知らせしました新校舎の改築工事計画は、昭和五十年三月にはめでたく第一期工事(教室棟三階建十八教室)が完了し、翌四月には三年生、二年生が待望久しく移動しました。県下に誇る教室棟との折紙がつけられました。

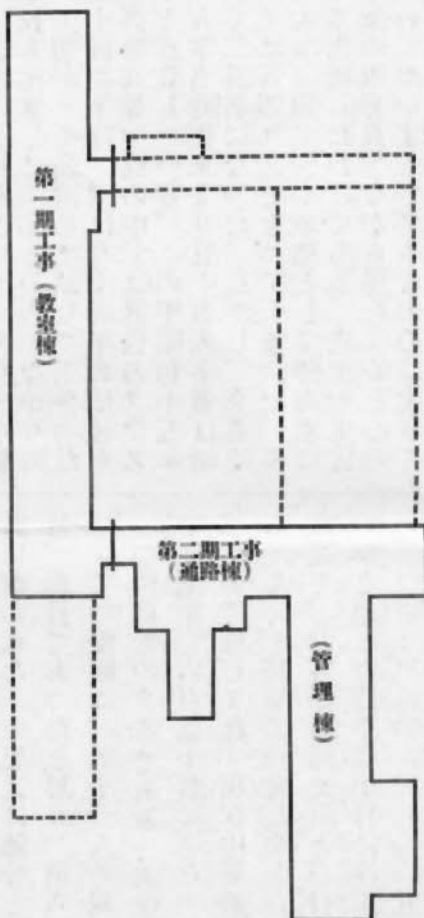
現在は第二期工事が、第一期工事同様井上工業KKによって進行しております。旧南校舎は教務室等一部を残して撤去され、その跡に八月以来、坑打ち、基礎工事等がハイピッチで進められ、三階までの骨組みがほぼ完了しております。当初の計画では教室棟(残り九教室)、管理棟の東半分、

通路棟の方では、一階は生徒の出入り口になり、二階は玄関になります。そこへは階段によって通じるようになります。三階は進路指導室、カンセラール室等が予定されています。二階の正面玄関は、歴史と伝統ある母校にふさわしいものにすべく、関係者一同、対策を立てております。以上が第二期工事のあらましでございます。

いちよう並木の葉はすでに、冬を迎えるわけですが、やがて芽をふきかけようとする来春三月には、末尾の図のごとき鐘形の建物ではあります。第二期工事でも完成することでしょう。いくたの歴史を刻みこんできた講堂は以前のままの姿で工事の

進行を見守っております。
第三期工事や、玄関の周辺、中庭の整備等いろいろ残された仕事もございますので

旧に倍するご支援のほどお願い申し上げます。
(塩浦)



創立八〇周年記念事業募金状況の

中間報告とお願いについて

昨年の会報で報告致しましたが、昭和五十二年には、本校が創立されて八〇周年を迎え、記念事業として、校史編纂・校庭改修・学芸部室の新築を企画し、そのための募金を致しておりますので、その概要を報告致します。

同窓会一般寄付は、会員の皆様のご厚情により、十一月末現在までに、七八二名の方々から七八〇万円の御寄付を戴きました。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。募金の目標額は、当初七千万円(内同窓会一般寄付は一千万円)でありましたが、物価上昇のため約三割の増加を見込まなければならなくなりました。誠に恐縮ですが、趣意書と振替用紙を同封しますのでよろしくお願ひします。

同窓会特志寄付は、井上工業株式会社を始め、多数の有志の方々や会社から、多額の御寄付を戴き深く感謝申し上げます。昨

年七月八〇周年記念事業委員会の発足以来、生憎経済界はかつてない不況に見舞われ、特志寄付については不安もありましたが、幸い同窓生の母校愛と役員の皆様の献身的なご努力により、募金は順調に伸びております。PTA特志寄付は、各PTA地区委員の方々の格別なお骨折りにより、着々とその成果を上げております。

募金は順調に進んでいるとはいえ、何分にも一億円近い額でございますので、今後とも一層のご援助を賜りたくよろしくお願ひ致します。

なほ現在までの募金額は次の通りです。

同窓会特志寄付申込額 二、七六八万円

(内 納入額 一、一四〇万円)

同窓会一般寄付納入額 七八〇万円

PTA特志寄付納入額 一、四七八万円

計 五、〇二六万円

(戸塚)

昭和50年度同窓会経常会計予算

(50年1月~12月)

収入の部		
費目	昭和50年予算	備考
前年度からの繰越金	226,021	
入会金	405,000	1,000円×405
維持会費	1,200,000	
利息	1,000	
合 計	1,832,021	

支出の部		
費目	昭和50年予算	備考
会議費	40,000	1万
祝賀費	150,000	7万
饗別費	100,000	0
慶弔費	60,000	3万
通信・印刷費	220,000	7万
旅費	50,000	1万
總會通信印刷費等	450,000	10万
同窓会報	150,000	0
事務費	400,000	33万
予備費	212,021	△79,688万
合 計	1,832,021	

会計 校内幹事 塩浦徳三郎
角田匡巳

昭和50年度 庶務報告

- 50.1.25 同窓会総会 高崎 高崎商工会議所大ホール
5.30 京浜同窓会新入会員 東京 都道府県会館
歓迎会
7.10 創立80周年記念事業 高崎 高崎高等学校
募金部委員会
11.20 京浜同窓会総会 東京 都道府県会館

昭和49年度同窓会経常会計報告

(49年1月~12月)

収入の部			
費目	昭和49年予算	実収入	備考
前年度からの繰越金	265,325	265,325	
入会金	405,000	429,000	金目1,000円×425 通目1,000円×4
維持会費	614,610	1,577,000	
利息	6,774	17,638	
合 計	1,291,709	2,288,963	

支出の部			
費目	昭和49年予算	実支出	備考
会議費	30,000	61,540	
祝賀費	80,000	134,940	期別・地区別ク ラス会費金
饗別費	100,000	86,000	転退職職員へ
慶弔費	30,000	54,120	香典・花輪
通信・印刷費	150,000	191,560	
旅費	40,000	34,010	京浜同窓会3回
總會通信印刷費等	350,000	214,560	
同窓会報	150,000	72,000	
事務費	70,000	482,242	人件費・事務用品
予備費	291,709	231,970	吹流し、図書
特別会計へ		500,000	
次年度への繰越		226,021	
合 計	1,291,709	2,288,963	

昭和49年2月2日

会計 校内幹事 塩浦徳三郎
角田匡巳

四十四回近況報告

旧制高中のクラス会歌に「この友得たる
嬉しさに、うちつれだちて野に行かむ語ら
いすればうら若き心の糸のふるかな」の
一節がある。私達四十四期生が去る八月十五
日、終戦から三十年、又卒業三十年の記念
にと十八才の多感な中学生の原点に返って
多難であった青春時代を思い出して、あら
ゆる制約を離れて「心と心のふれ合い」を
もう一度確かめ合うために風変わりなクラ
ス会を行った。例年は懇親会に終るこの会も
卒業三十年というくぎりによいのを機に、
何かやってみようという意見が一致、白線二本
に「中学」と染め出した鉢巻、胸に「高
中」とマークを記したTシャツを全員着用、君
ヶ代のラッパ吹奏で始まり、体力章検定の
真似事をやってみたが、いまや初老の域に
達した体は十八才の体には戻らなかった。
最年長の中曾根宇内先生以下恩師諸先生も
参加下さり、なかでも、我々と一番縁の深
かった現東大イギリス科主任教授多田幸蔵
先生か、恩師代表で調辞をあたえられた。
先生は、「三十年経った今日、君達と私の
心と心のふれ合いが未だに続いているかど
うか確めにやってみよう」という言葉である
感激で一杯であった。先生の一言一言が
しんと胸一杯にひろがり目頭が熱くなった。
そして、故田中悦平先生をも含めてなんと
すばらしい恩師に恵まれたことと考へさせ
られた。公務の多忙をさいて、先輩の中曾
根幹事長も出席して「心と心のつながりの
いかに大切か」を強調して話して下さった。
私達四十四期生は、当に八十周年の伝統を
誇る現高崎高等学校の中では異色のクラス
であると思自負している。この年昭和十五年
から、入学当時従来より五十名入学者は増
員されて二百名になった。しかし、卒業時
に於いては百四九名となっていました。み
な国の大事に殉ずべく敢然として陸海軍に
志願して出征したわけである。先生も生徒
も同じ釜の飯を食べながら得た「心と心の
ふれ合い」がいまもつてみな心の生きて
おり意義のあるクラス会であった。
四十四期生常任理事 真木 実

私の高校時代の思い出

高見沢哲二

私ほど多くの思い出に埋った高校時代を
過ごした者は、そうザラにはいないだろう。
特別に（落第して）四年間通学する許可を
いただき、入学直前に焼け落ちた校舎を目
前にして、高松町の兵舎跡で最初の一年を
学んだ。もともと四年間通ったお蔭で数多
くの友人に恵まれた。入学時に入部したラ
グビー部、その練習の為一年生部員二十余
名と吹きさらしの八千代橋を渡り、現在の
高々の校庭まで毎日通った山口・中村・飯
島君等の効な顔が目に浮ぶ。夏合宿のつら
かったこと。階段の手すりにつかまり二階
へ這い上ったこと。でも諸先輩方のお蔭で
第六回広島国体に出場、青春の一ページを
印した。バスケット部の汗ビツショリの合
宿練習、同じカマのめしを食い青春の全て
をぶつけ合った仲間達。今も親しく交際を
願っている。担任の立石先生、登山の好き
な小林先生、恩師の故富田ラグビー部長、
監督の岡田先生、バスケット部長清水先生、
ラグビー、バスケットの諸先輩には特にか
わいがられた。今思えば随分と反抗的な生
徒、部員であったと思う。第六回全校マラ
ソンでの優勝は、男子三人の親である今唯
一つの自慢のタネである。入学時、卒業時
の同期生、六百数十名に「らっちゃん」の
アタ名で親しまれ、現在中華料理店「らっ
ちゃん」を高崎で経営しながら、若い高校
生達を、お客様に迎えると、自由に、のび
のびと過ごした四年間が目に浮ぶ毎日である。
五十四回卒業

本校の歩み

きびしい進級—のことなど

草創のころ—そのⅢ

入学試験 分校設置のことが本きまりとなり、峰岸米造分校主任が赴任したのが明治三十年三月二十九日。四月一日から群馬片岡郡役所で執務が開始され、早速入学試験が行われることになった。定員二学級八十名のところ七十一名(七十六名という資料もある)の志願者だった。そこで、全員入学ときまり試験は中止された。このことを知った受験生は弁当を持参して集ったがたぐちに解散、烏川畔で日なたぼっこをしながら弁当を食って帰宅したという話である。翌年度からは入試が続行された。

教師 教員は五名。峰岸主任が東京で選んでつれてこられた人達だった。英語の石川鶴太郎(岐阜・アタ名ツル)、体操の沢井礎吉(京都・豆銀貨)・絵画の芳賀金登(群馬・ドモリ)・数学の山本幸太郎(石川・親方)・国漢の大塩平作(栃木・旦那)。早速アタ名を頂戴しているところはいまとかわらない。峰岸主任は「貴公子」だった。

授業 授業は赤坂長松寺で行われ、一年生の科目は倫理(週一時間)・国語・漢文・書取作文(七時間)・英語(三時間)・歴史・地理(三時間)・算術・幾何(四時間)・習字(一時間)・画学(二時間)・体操(三時間)の十二科目。百点法で成績が評価され、六十点以上が合格。平常点六割、学期試験四割というのが基準であった。ほかに操行があり、その評定は無条件で落第であった。進級 第一回生の一年生学年成績表をみると、

在籍者六十名、入学時よりすでに十一名減。そのうち十名が落第し、五十名が二年生に進級した。操行丁はいないが、長欠者一名のほか九名は成績不良で落第になつており、ずいぶんきびしいものであった。ちなみに、進級者五十名のうち無事卒業できたのはわずかに十九名。これまた非常にきびしいというべきである。第一回卒業生は全部で三十四名であるから、残り十五名はその後の他校からの転入者であり、大部分は多野分校(藤岡)からの転入者だった。年令 右の成績表から入学時の年令を逆算してみると最高十七年十ヶ月(いまの高校三年生)、最低十二年五ヶ月(中学一年生)とかなりのひらきがかった。大部分は十五才。これは当時、中学校入学資格は高等小学校二年(小学六年生)修了以上となつていたので、始めてのことなので、多くは高等小学校四年卒業生が応募したためである。いまの中学校よりは二年以上も年令が高かったのだ、成績物を見ると比較にならないほど、どれも能筆である。



草創当時の教科書

なるとはいえ、これだけ一時に自弁するとなると、やはり中農以上の資力を必要とした。

教科書 教科書は文部省検定の尋常中学校用の印刷されたものを使用した。しかしなかには自分でわざわざ筆写したものを使用することがあった。内容は理科系や地歴のものは旧弊をまぬがれないが、国漢系のものはかなり程度が高く、分量も豊富で、ことに漢文にあつてはいまよりはるかに高度で、初学年から白文講読も行はれ、高学年では原書(唐本)をそのまま、使用するこ

が多かった。

生徒心得 前文と八ヶ条の心得が示されたほかに、「上校ノ節ハ必ズ本校所定ノ制服ヲ着用スベシ」との規定もあつたが、まだ制服・校章などは制定されていなかった。(竹林 今春校内幹事をやめましたので、今回で擱筆、交代します。)

▼日本の海外進出に伴ない海外で活躍する同窓生も増加の一途。そこで海外生活10年のベテラン54期清水明君が中心となり欧州高々支部を発会させる予定だったが来春帰国となり、この計画もフイ。目下後任を物色中、世界中に支部ができるのを期待したい。

▼竹林先生の「本校の歩み」も一応終了、その代わりの企画を目下検討中。御希望の企画がありましたら、校内幹事宛御一報下さい。

▼会報も一年に一回では寂しいが、印刷代より郵送代に莫大の費用がかかるのが難点。期別、地区別の様な配布網があれば回数もふやせるのだが。名案はありませんか。

▼51年度総会ならびに新年会は一月二十四日(日)午後三時から。場所は市役所西側高崎地区医療センターにて、乞て来場。

▼会報係が岡村の下に鈴木・植杉と増員になりました。今後とも宜しく。

名簿係からのお願い

早いもので新名簿発行まであと一年余となりました。そこでことしも異動調査をハガキでお願いいたします。只今、新名簿原稿の全面書き換えの作業を進めておりますので、会員全員の方に御面倒でも改めて通知をいただき、正確を期したいと存じます。特に、現在大学在学中の方、社会人三、四年生までの方が中々つかめておりません。一段の御協力を願います。尚、名簿予約の受付は来年の同窓会報で連絡いたします。

旧師のコラム

始あるものは終あり

内藤由己男

高中に終あらしめた最後の校長は誰であったのか、高崎のレールを敷いた初代校長は誰であったのか、それは両つながら私であったのである。しかし数多い卒業生の中で誰一人ただの一度もそんなことを考えた者は無いであろう。

かく壮語する私は一体何者であろうか、今何をしているのであるかと言え、四年前に公職を退いて、それから今日まで魚釣を本業とし、囲碁をアルバイトとし、読書を趣味として凡庸にその日を過している一市井人である。

年は喜寿を迎えようとしている。

退職をした時、自分の意志決定によりそれを行ったので、生死の決定も出来るならば自分の意志によってそれを断行したのだとその後しばらくは考えていたのだった。しかしよくよく考えてみると、公職を退くことは後進に道を開くという社会的意義があるのであるが、自殺ということは社会的に格別積極的意義を一般的には持たないものと考えられる。作家という人達の中には、自殺することに依って読者に或る感銘を与え、その作品に光彩を添えるものもあるのであるが、私の身上にはそれもない事である。従って良い死を希う為には死を考えないことであるという心境になつて来た。死を私物として云々することはよくないことで、それは運命に任せるべ

きものであるという心境になつて来た。夕焼のあの華麗な壮麗なシーンとした大空の下に立つと、しみじみと小さな人間の運命というものに思い到るのである。

逢はざらめやも

安居次夫

遠い日の記憶の中から、私の内に、ふたび甦つてきたものに、次のような歌がある。「逢ひてただ微笑みかはしうなづかば足りむ逢ひなり逢はざらめやも」牧水の友をおもう一首である。

私にとって、このような歌のおもむきが、心にしみて感じられるようになったのは、そろそろ還暦も近くなつた頃からであらうか。

還暦といへば、私は定年退職の日を高崎高校で迎えた。その日まで、教職についてから三十七年、転任は六回に及んだが、そのうち高崎に在つた歳月は、前後あわせて二十三年になる。私の教職生活の大半は、高崎と共にあつたと言えよう。昭和十三年、私が赴任した当時の生徒諸君は、今日ではすでに五十歳を越えた人々である。それらの諸君のクラス会などに出席する時の心境は、稿の最初に掲げた牧水の歌が、これを尽くしている。

微笑み交はしうなづかば足りむ逢ひなりとは、よくも歌い得たものだと思う。こうした心境の理解は、若い世代の人々には、や、無理かもしれないが……。

「青年とは未来に生きる者であり、老人とは過去に生きる者である」という言葉を、長い間、私は生活の信条としてきていた。在職中、私は常に青年であることを希み、そのための努力もつづけてきた。現在にお

いても、そうあることを希まないわけでは、過ぎ去つた日々の回顧に、私を誘うことが多くなつた。かつての日共にあつた風景や人々の面影が、折にふれ、なつかしまれてならない。それらの人々に、めぐり逢う機会さえ与えられれば、「逢はざらめやも」という気持は、強く、私をとらえて離さないものである。

母校だより

翠巒体育会の発足と活躍

既に御存知の方が多くかと思いますが、戦後の運動部の卒業生達が昨年翠巒体育会をつくりました。これは母校運動部の後援、会員相互の親睦、そして各部OB会の充実を旗印に結成されたのです。

クラブの指導に當っている私達の立場からみて、旧来の所属OBから、個人から夫々の形態で指導、後援していただいた縦の関係から運動部連合体とも云へる組織で、見守つて下さるのですから心強く、ファイとも増すものです。又OBの面からみれば

同じ時代に活躍した連中が、クラブを問わずふた、び結び合えるのですから、しぜん視野も広がり交友も密になつて行くことでしよう。そのことよりも広義に於けるスポーツマンの結束は無条件に意義深いものとして受けとめ育てねばと痛感しております。この会の会長にはサッカーの国峰善次郎(50回)副会長はテニスの勝俣真(52)野球の中川保(52)バスケットの友松敏三(61)が選ばれました。

早速新入生に「運動部への勧め」を配り運動部の意義を示しました。又屋内外用の応援旗を学校に贈り、野球の応援ともなれば鷹のマークに校章が入つた大応援旗が翻つております。又インターハイ、国体出場者に餞別、荒れた校庭の排水工事と事業面でも活躍、先日懸案の会報も発刊され、OB、現役の交流の広場として活用していただくよう呼びかけております。まだ発足し二年目、同窓会、学校当局に御心配をかけながら地味ですが着々と前進しております。お蔭様で現役の各部の活躍も目ざましく、近い将来必ず卒業生も鼻高くしてスポーツ談義に花を咲かせてくれることを夢みて紹介を終ります。(川島)

進学状況

種別	合計	48年	49年	50年
A 国立一期	75	90	101	
B 国立二期	63	61	77	
C 公立	19	15	14	
D 私立	373	345	389	
A+B+C+D	530	511	581	
華大学・短大・各種	5	7	6	
総計	535	514	587	
卒業生数	368	369	362	
現役進学者数	134	133	126	
合格者/進学希望者	37.0%	36.1%	34.8%	

	48年	49年	50年		48年	49年	50年
北大	3	10	6	青学大	19	17	14
東北大	8	21	18	学習大	13	3	10
千葉大	12	11	7	慶応大	36	26	31
東大	11	5	20	芝浦工大	14	1	5
一橋大	5	11	4	上智大	9	9	11
東工大	3	2	4	中央大	27	29	32
筑波大	7	7	7	東海大	4	3	3
新潟大	17	11	14	東京電機	3	1	1
金沢大	2	3	5	理科大	28	17	22
京都大	5	3	8	医大	2	5	1
群大	34	30	34	東洋大	10	6	5
埼玉大	9	7	11	日本大	20	22	22
東外大	2	1	2	法政大	22	23	28
山梨大	2	1	2	明治大	53	50	41
信州大	3	8	7	立教大	13	13	26
横国大	2	4	5	立命館大	5	4	11
高経大	9	7	8	同志社	1	5	6
横市大	4	6	3	早稲田大	53	43	61